

【5】

なぜ徳島に城下町ができたのか

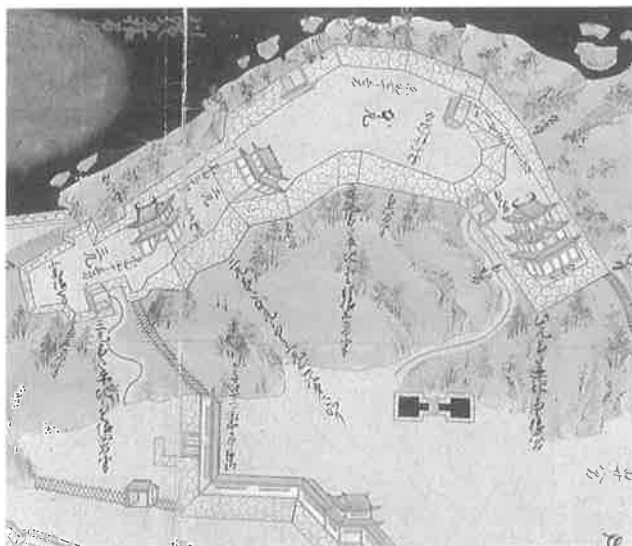
1. 生徒用資料解説

写真 「阿波国徳島城之図」(生徒用テキスト9P)

(徳島市立徳島城博物館編『徳島城下絵図』, 2000年)

天保3(1646)年 東西 361.1 cm×南北 240.0 cm 手書き彩色, 見取図, 個人蔵

徳島城下町については何枚もの絵図が作成されている。ここに載せた1646年のものは、その中でも比較的早い時期のものである。幕府は天保元(1644)年に諸藩に城下絵図を提出させたが、本図はその控である。中央部分に徳島城が描かれ、東二の丸に立つ天守(右に拡大写真)をはじめ、櫓、枡形、塀、石垣(右下の写真は本丸東端に残る天正年間の野面積石垣, 以上2点は「徳島城まるごと博物館」徳島城博物館, 2008年より)などの防御施設が描かれている。



なお、下の写真は、明治5(1872)年頃に写された、徳島城の唯一の写真。鷲の門や月見櫓に加えて、中央やや上に山上の天守が見える点で貴重である(「徳島城まるごと博物館」)。

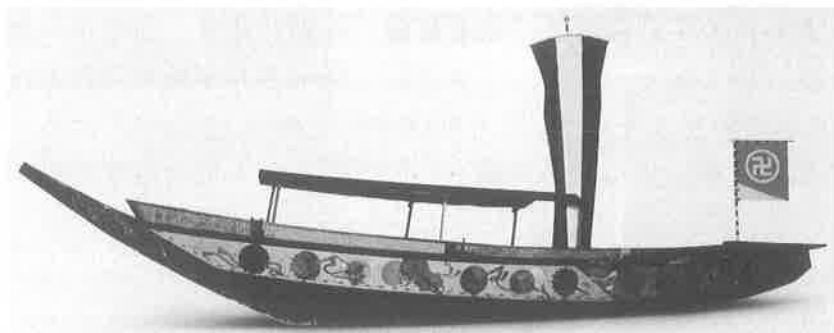


本図に戻り、目を引くのは、濃紺色で示された海・川・堀である。左上部には「吉野川の枝川」と別宮川(現・吉野川)が示されているが、「吉野川」との川名が絵図で示されたものでは最古の絵図である。城下には大小の河川が網の目のように流れており、湿地帯を埋め立てながら城下町が建設されたこと、また川が徳島城の防御の役割を果たしていたことが確認できる。

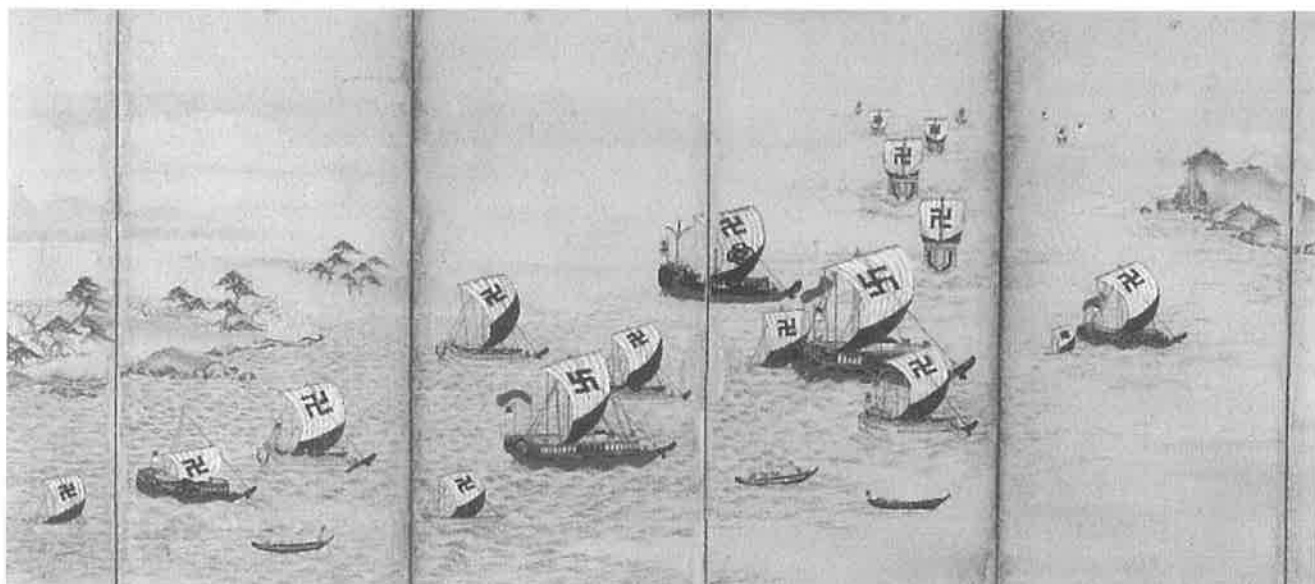
さて、城の周囲(徳島・寺島・出来島・助任・常三島・福島・住吉島)には「侍屋敷」



「葺屋敷」が占め、中央やや左下には「足軽町」が存在した。



また東端には「舟入」と記された水軍基地がみえる。当初は常三島南島の安宅島（現在の徳島大学工学部付近）に、船置所や役所、船頭屋敷・加子屋敷が存在したが、寛永 16 (1639)年以降に、本図に見える安宅地区（現在の城東中学校敷地）に移転したものである。



徳島藩では、参勤交代する際には、船が不可欠であったため、こうした水軍が存在した（写真上は、「徳島藩御召鯨船千山丸」で、藩主が大船への乗り継ぐ際に用いられた船で、金箔を貼り、装飾が施されている、徳島城博物館所蔵、写真下は、「徳島藩参勤交代渡海図屏風」の一部、近世後期—近代の藩御用絵師森崎春潮の作とされる。蓮花寺蔵、徳島城博物館寄託。写真2点は展示図録「わがまちのたからもの」徳島城博物館、2008年より取込）。

一方、「町屋」と示された町人地は、内町・新町が中心であり、西端の佐古、東端の福島、北側の助任にもそれぞれ存在していた。

写真 「徳島盃蘭盆組踊之図」(生徒用テキスト10P)

1巻、紙本著色、縦 34.7 cm × 横 578.0 cm、近世後期、原田弘也氏蔵
(特別展図録『秀吉の町・家康の町』徳島城博物館、2007年より)

江戸時代の盆踊りを描いた数少ない作品の一つで、「組踊」(くみおどり)を描いた唯一の作品。徳島城下 14 町から繰り出した「組踊」が、出し物を凝らして繰り出す様子を、色鮮やかに描いている。同じ意匠でそろえた踊り子が道から溢れんばかりに踊りを繰り広げ、それを多くの見物人が取り巻き楽しんでいる。

ここで注目されるのは、現在の阿波踊りのような「連」ではなく、町が踊りや出し物の単位となっている点である。14 町の構成は、富田中園組の十二支踊り(図はこの拡大部分)、

籠屋町組の鏡研ぎ踊り，助任町組の拳踊り，福島町組の星踊り，西助任町組の汐干狩踊り，八百屋町組の石切屋踊り，佐古大谷組の宇治橋踊り，新屋敷組の祇園会踊り，通町組の越後獅子踊り，石場組の忠臣蔵十段目伊五踊り，佐古十一丁目組の物干さわぎ踊り，佐古八丁目組の胡蝶踊り，紙屋町二丁目組の浮世又平踊り，大工町組の雨乞踊り，となっている。

なお，二階建ての町屋が道にそって建ち並んでいる様子も，当時の町人地の景観の特徴をよく示している。

以下，参考までに全部分を掲載する。



24 徳島安藝屋船橋之図
文化・大保存期(1824-44)〔歴史〕 縦34.7cm・横574.0cm 巻子巻 徳島県埋蔵文化財センター蔵

写真 徳島城下町跡徳島一丁目地点から出土した木簡の赤外線写真
(公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センターのホームページより)

<http://www.tokushima-maibun.net/modules/bulletin/index.php?storytopic=2380>

「徳島城下町跡徳島町一丁目」地点は、徳島市徳島町1丁目5に所在し、明治11(1878)年に高知裁判所徳島支庁庁舎が建設されて以降、徳島地方裁判所が設置されている。この地は、近世では徳島城の外郭にあたる「徳島惣構」を構成する「徳島」の一角に位置し、徳島藩蔵や藩の家老・中老・物頭等上級家臣屋敷地によって構成されていた。

調査地点は、安政年間(1854年～1860年)作製の「御山下島分絵図(徳島)」には、「新御蔵」敷地と徳島藩中老森甚太夫家、中老武藤左膳家敷地として、徳島城下町成立期にあたる正保3(1646)年「阿波国徳島城之図」には「蔵屋敷」として記載されていることから、徳島藩御蔵や上級武家屋敷地の一角に該当する。

2013年の徳島県埋蔵文化財センターの調査により、ここからは17世紀後半の溝状の遺構と、そこから木簡226点が出土した。その大半が米俵等に付した荷札木簡であった。形状は、俵物に突き刺すために先端を尖らした一群、俵物から吊り下げるために紐通し穴をあけた一群、俵物から吊り下げるために上部左右に抉りを入れた一群などがあり、多様であるという。徳島藩では米1俵に5斗入っていたが、木簡にはその生産地として「上佐那河内村」「浅川村」「くし川村」「大野村」「吉野村」「板野郡」等、名東郡佐那河内村や海部郡の地名が記されており、領内からの年貢米がこの「蔵屋敷」に納められていたことが判明する。

写真右(表面)では、年貢米として米五斗を辺川村(現在海部郡牟岐町辺川)の貞左衛門が納めたことを記し、写真左(裏面)は村役人である五人組の儀三郎が「升起」(年貢米の品質検査カ)をしたことを記している。この木簡を付した米俵が、辺川村から徳島城屋敷まで運ばれたものと考えられる。

写真 絵はがき 「藍場の昔懐かしき新町川」(生徒用テキスト10P)

20世紀前半(大正・昭和) 9.2cm×14.3cm 高田恵二氏所蔵

(特別展図録『秀吉の町・家康の町』徳島城博物館, 2007年より)

白壁の藍倉が建ち並び、川には帆掛け船が物資を輸送している。近代の水を活かした町の様子を示す写真は、他にも多く残されており、「水運」が中心であった当時の状況を理解しやすい。

(参考1) 明治後期の城下町徳島 「東宮行啓記念写真帳」(1908年)より



眉山中腹から撮影された徳島市街地の様子。上には吉野川、右上に紀伊水道、中心部を左から右に新町川、そして中央左側に城山が写し出されている。とくに新町川筋には、白

壁の藍倉が軒を連ねている。山裾には寺町の寺院が並び、市街地は低層（2階建てが大半）の町屋の屋根が密集していることがうかがえる。

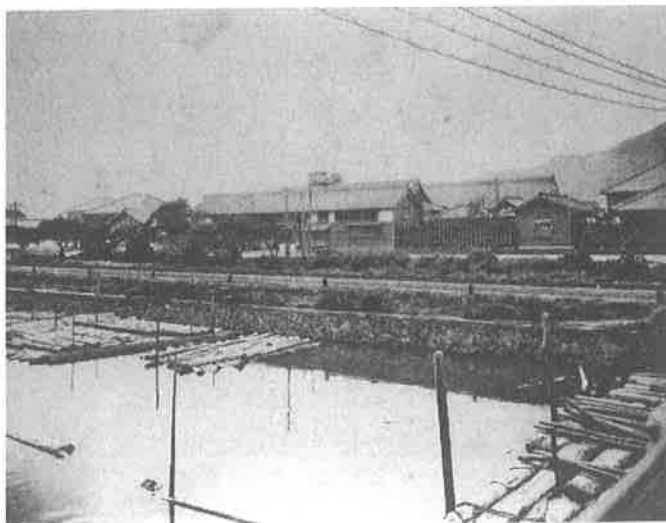
（参考2）賀島屋敷と寺島川

（「東宮殿下行啓記念写真帳」1922年）

寺島川は現在埋め立てられ、JR牟岐線となっている。川の西側にあった家老・賀島屋敷は、近代に入ると1930年まで徳島県庁舎となっていた。

ここでは寺島川に材木が浮かべられていることが確認できる。

（特別展図録『秀吉の町・家康の町』徳島城博物館，2007年より）



（参考3）新町川の藍倉

（展示パンフレット「城下町徳島」徳島県立文書館，2005年より）



表 （石躍胤央・高橋啓他『徳島県の歴史』山川出版社，2007年，136頁より）

2 授業の目標と授業過程

（1）目標

（関心・意欲・態度）

○城下町の特徴について、自分なりに意見を持って積極的に発言しようとする。

（思考・判断・表現）

○学習した内容や具体的な資料に基づいて、幕藩体制下に形成された城下町の特徴について、立地、居住した人びとの身分、機能の観点から、考え説明できる。

（資料活用技能）

○城下町の特徴について説明するために、教科書の資料や提示された資料、あるいは自分が調べてきた資料を活用できる。

(知識・理解)

- ①幕藩体制のもとでの藩領支配の拠点として役割，②藩の政治的・経済的中枢として建設された城下町の特徴，③および全国市場につらなる物流の結節点としての城下町の機能について，理解し説明できる。

(2) 授業過程

〈1. 導入〉蜂須賀氏の支配と徳島城

- ・羽柴秀吉の家臣である蜂須賀氏が阿波国を領地とし，これが後の徳島藩となったこと，その蜂須賀氏が一宮城ではなく徳島城を本拠とし，徳島城下町を建設したことを説明。
- ・余裕があれば，阿波九城（支城）の位置を確認し身近な地域との関連を示唆した上で，それが一国一城令により廃止された事実を示す。藩は必ずしも独立した存在ではなく，その軍事力は幕府の統制下におかれていたこと，また戦時から平時へと時代が変化しつつあったことを理解したい。
- ・設問1なぜ蜂須賀氏は，一宮城ではなく徳島城を拠点としたのだろうか？

〈蜂須賀氏の立場〉

前の単元での一宮城の図と，徳島城下絵図とを比較する

回答例．山城から平山城，平地が多い場所，水運を利用しやすい，広い土地 etc = こうした特徴は何を意味するのだろうか？みんなで考えよう。

(あわせて阿波国概略図を利用して，徳島の地政学的位置を確認してもよい

ex 吉野川を通じて西部地域の統治，海を通じて南部の統治や，阿波外部との関係を持ちやすい等)

〈2. 展開1〉17世紀絵図から徳島城下町を探ろう。

- ・設問2 徳島城下町をさぐる

正保3年(1646)絵図をよく見て気づいたことを発表しよう。

- 回答例・いくつもの島からできた都市 ⇒ 湿地帯にできた都市
- ・まだ田んぼや海のところが多い ⇒ これからも都市は拡大
 - ・天守閣は三重で，しかも本丸にない ⇒ マニアック？！
 - ・城の区画と内町付近の川沿いは石垣 ⇒ 湿地を埋め立てた技術的背景
 - ・多くが「侍屋敷」や「足軽町」 ⇒ 城下町の大半が武家地
 - ・東端の海近くに四角い区画 ⇒ 阿波水軍の基地／参勤交代に必要
 - ・「町屋」が少ない ⇒ 意外に少ない町人地／でも成長

- ・表で，17世紀の町人地には，いつもの「町」が存在していたこと等を確認

(正保絵図とあわせて寛政8年絵図(1796)や現在の地形図と比較してもよい = 都市拡大の様相)

- ・余裕があれば，「徳島孟蘭盆組踊之図」(近世後期の作)を見せて，阿波踊りが，町ごとに実施されていることに気付かせたい(町ごとに異なる踊り・テーマ性・意匠など多様)

- ・生徒の気づいた諸点が、城下町の特徴（⇒部分）である点を確認しつつ小括
 - ① 徳島城下町は湿地を埋め立ててできた都市＝水運の利用が可能
 - ② 武士・町人・寺などが、身分に応じて計画的に配置されて居住／百姓は不在＝武士団や町人を身近におくためにも、広い土地に都市建設

〈 3. 展開 2 〉

- ・設問 3 城下町を流れる川をどのように利用していたのだろうか

（ 2. 展開 1 の①②を活かしつつ…）

素材 1. 徳島地方裁判所付近から出土の木簡（年貢米についていた荷札）

⇒領内の年貢米が徳島城下の蔵に納められていた。

素材 2. 藍場浜付近の藍蔵&船／石垣の古写真（近代）

⇒領内で産出された藍玉・葉が、藍倉に一旦保管され、全国へ流通。

これらの素材からわかることをまとめる

- ① 城下町は年貢米を集めるだけでなく、城下に住む武士・町人の生活に必要な物資を、外の世界から移入させてくる必要があった消費都市
- ② 領内の産物を、全国各地に移出していく拠点
- ③ 領内⇔城下、あるいは城下⇔全国各地と、産物・物資を流通させる結節点＝だから水運を利用できる都市である必要

〈 4. まとめ 〉

○各章で指摘できた点をふまえ、もう一度「どうして徳島に城下町ができたのか？」という設問に立ち返る。

○○だったから、徳島に城下町を作った。

△△…

××…

○その上で、展開

・発展例 1 自分たちの地域が、徳島城下町とどのような関わりがあったのだろうか。

ex 調べ学習

⇒徳島市内でなくても、身の回りの地域（領内）が城下町と政治的・経済的に関連していたことに気づかせる。

・発展例 2 同じ頃に建設された都市はどこだろう？その共通点は？

ex 江戸・大坂・高松…海沿い埋め立て地

⇒徳島だけの特徴ではなく、この時期に建設された城下町としての共通性に気づかせる。

・発展例 3 水を活かした城下町が、その後どのように変化して現在に至るのか、調べてみる。あるいは城下町の痕跡を歩いて探す。

ex. 現地を歩き、疑問点を徳島城博物館の学芸員に質問したり、「ひょうたん島クルーズ」に乗って、現在の都市を、視点をかえて川から眺め考える。

3 板書計画

どうして徳島に城下町ができたのか？ —徳島城下町の成立—

1. 蜂須賀氏の支配と徳島城

- ・天正13年、蜂須賀氏が阿波入国
- ・一宮城から徳島城へ

⇒領地（「藩」）を支配する拠点として、徳島城・徳島城下町を建設

2. 17世紀絵図から徳島城下町を探ろう —徳島城下町の構成

- ・（生徒が気づいた点1）
- ・（生徒が気づいた点2） …etc

⇒湿地を埋め立ててできた都市

=逆に水運を活用

⇒武士（家臣団）と町人らが、身分に応じて配置され居住＝百姓不在

3. 「水の都」—物流の結節点—

- ・消費都市
- ・阿波の産物を各地へ移出する拠点の一つ

まとめ

- ① 軍事的防御のためだけでなく、藩内を支配する政治・経済の中心地
- ② 武士と町人の居住地であり、一大消費地
- ③ 水運を活かし、領内や全国とを結ぶ物流の結節点

4. 発展的教材研究のための資料とその解説

- ・佐藤信・吉田伸之編『新体系日本史6都市社会史』山川出版社，2001年）
- ・山口啓二『鎖国と開国』（岩波現代文庫）（岩波書店，2006年）
- ・石躍胤央・高橋啓他『徳島県の歴史』山川出版社，2007年
- ・石躍胤央編『街道の日本史44徳島・淡路と鳴門海峡』吉川弘文館，2006年
- ・徳島市立徳島城博物館編『徳島城下絵図』徳島市立徳島城博物館，2000年
- ・特別展図録『秀吉の町・家康の町』徳島市立徳島城博物館，2007年
- ・展示図録「徳島城まるごと博物館」徳島城博物館，2008年
- ・展示図録「わがまちのたからもの」徳島城博物館，2008年

5. 評価規準

徳島の伝統と文化を知る。

○なぜ徳島に城下町ができたのか，その理由を探ることで，藩領支配の中心地という政治的側面，水運を活かした物流の結節点という経済的側面など，複数の側面から徳島城下町の特徴を理解できる。また，蜂須賀氏による支配の立場の観点だけでなく，都市機能やそこに住み生きた人たちにも目を向けることができる。

○ふだん見慣れた徳島が，違う景色に見える。

世界や日本の中における徳島の伝統と文化について、公正に判断する。

○徳島城下町の特徴を通じて、幕府と藩との関係、全国市場との関連、新しい町人文化の生まれる場としての側面など、当該期に建設された城下町に、共通して見られる要素を理解することができる。